

巻 頭 言

研究方法の転換

財団法人 いも類振興会

理事長 生天目 健 蔵

明治から昭和の初期までは、医学、科学、陸軍のこととなると、本場はドイツときまっただようなものであったが、それが今では米国が中心となって、多くの学者、研究者がアメリカに押しかけている。

第二の点は、従来、学問とか、研究とかは個人の独創的見解のみで推進されてきたものであるが、昨今は研究費の投入に左右されている。遺伝子の全容解読に当って、アメリカの研究グループから、「日本は金もださずに、タダ乗りして」と、強く非難されて、学者が困ったと報告されたが、昨今の研究態度は、物量の投入に大きな期待が掛っていることに相違ない。

第三に、最近の医学上の発明、発見は、日本と米国、日本と英国の大学の交流の中で、グループとして発見され、発明されている。従って、昔のように、孤高、孤独では、成功が覚束ない。成功したとしても、長年月が掛り、その間に他の研究者グループに先を越されることになる。

なぜ、こうしたことを思いついたか、というと、稲の雄性遺伝子の研究に取り組んでいる研究者の報道を読んでいると、雄性の遺伝子をかけ合わせて、次の成果を見て、次の方法を考え出すとあるのを見て、一朝一夕のことではない。それよりも、グループで分担し合って、初年度分の研究者、次年度分の研究者、それぞれ一人が追求するよりも、何人か

のグループが、基本的に打ち合わせ、総合的に終局の目標達成を心がけるべきではないかと思ったからである。

昭和37年頃、岡山の新見市と阿哲町の境を流れる高梁川を堰止めて、水島の臨海工業地帯に工業用水を供給するため作られる「河本ダム」の収用事件で、水没量の算定が争点となり、県は東大の教授を鑑定証人に呼んだので、当方は九州大学の教授を参考人に出頭して貰った。その先生と二泊3日、岡山のホテルで一緒に宿泊したら、その先生曰く、「あなたのような博学多才の人にお目に掛ったのははじめてだ。私は東京・大阪から博多までは山陽本線一本だと信じていたが、あなたの話を聞いて、山陰本線のあることを知ったので、今から米子に出て、沿線を眺めながら、博多に帰ります」と、誉められたのか、冷やかされたのか分らぬ挨拶を貰って、別れたことを記憶している。その先生の自宅を訪問すると、玄関の三畳の間に、小学生の使うような粗末な本立てがあったのを知っているので、先生の多幸を祈ってわかれたものである。

戦後、確かに時代は変った。しかし、学者や研究者の待遇を考えると、現在でもそんなにかわってはいない。財界、農業会等も、もっと援助して欲しいものである。それと同時に、研究者も、研究の態度・方法を転換すべきではないだろうか。